

前学校法人武田学園理事長

前広島文教女子大学長

前広島文教女子大学短期大学部学長

従四位勲三等

故武田ミキ儀学園葬儀

平成六年二月二十六日
於 広島文教女子大学体育館







式 次 第

導師 本願寺広島別院

輪 番 高 橋 廣 爾 師

副導師 東善坊

住 職 龍 花 康 丸 師

一、導師衆僧入場

一、開式の言葉

一、一同合掌礼拝

一、三 奉 拝

一、表 白 文

一、導師 焼 香

一、副導師 焼 香

一、葬儀委員長式辞

一、弔 辞

一、正 信 偈

本学園顧問 前内閣総理大臣

全私学連合代表 日本私立大学団体連合会会長

宮 澤 喜 一

橋 高 重 義

一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、
焼	告	閉	謝	弔	導	一	四
	別	式			師	同	句
		の			衆	合	念
		言			僧	掌	仏
		葉			退	礼	回
	式		辞	電	場	拜	向
香							香

式 辞

前武田学園理事長、^{広島}文教女子

大学学長、武田ミキ先生の
学園葬が執り行われるに

あたり謹んでお別れの言葉
を申し述べます。

一昨身体調を損われて

入院されて以来は、退院後も
ずっとご自宅で療養を続け
ておられました。しかし

お休みにならなから私にも
何度も手紙を下さう、また
学校のことではいろいろ指示を

されたりのご日常と聞いて、
安心しておりましたのに、昨年
十二月二十七日、突然の訃報に
接し、私はすっかり気分が
落ち込んでしまつた。

ミキ先生のことは私は

子供の頃からよく存じ上げて
おります。先生は明治三十四年、
広島県沼隈郡千歳村堂石で

神原家の五女としてお生まれ
になりました。先生の長兄、
神原勝太郎さんと私の父とは

五十年來の親しい友人であり、
また勝太郎さんのご長男の
秀夫さんは私の親友で、

ミキ先生も含めて神原家
の皆様とは家族ぐるみで
本当に長い間親しくおつき

あいをさせていたきました。

勝太郎さん、秀夫さんもすでに
亡く、今またミキ先生も

亡くなられ、なんとも申しよう
のない寂しさでいっぱいです。

ミキ先生。教育に身をこ

捧げることはあなたにとって
子供の頃からの夢でした。
その夢を實現すべく、

増川実科高等女学校に進学
され、卒業後は公立学校教員
として教職につかれました。

大正十一年から教壇に立つこと
二十年あまり、広島県指導主事
を最後に退職され、戦後

昭和二十三年には、長い間
教育の現場と教育行政に
従事された経験と基に、

戦後の新しい日本女性のた
めの理想の学園を築きたい
と決意され、全私財を投げ

打って今日の武田学園の
基礎となった広島県可部
女子専門学校を設立され
ました。当初はわずか三人
の教員、十八人の生徒での
スタートでした。設立と

同時に病に倒れ、また
当時は女手一人で学園を
創設することは大変難しい

時代でもありましたので、
学園運営が軌道に乗るまで
は言葉ではいい尽くせない

大変なご苦労があったことを
後年なんども承りました。
そうしたさまざまな困難を

ひとつひとつ乗り越えられ、
ミキ先生はしっかりと学園を
育てていかれました。昭和

三十七年には可部女子短期大学
を、そして昭和四十二年には
念願であつた広島文教女子

大学を設立され、昭和六十二年
には大学院も設置され今日
のりっぱな女子総合学園を

お築きになられました。

先生は一貫して正義に生き、
勤労を愛する人、責任感

の強い方でした。人、謙虚で
優雅な人を育成することをも
学園訓として打ち立て、

豊かな人間性の陶冶をし
め、す独自の教育を实践
してこられました。これが

学園全体を貫く精神とな
り、今日まで二万人を
越えるりっぱな学生・生徒を

社会に送り出してこられました。
た、女子教育に従事すること
実に七十二年、誠、を座右

の銘とされ、一生を教育に

捧げ尽くされました。（最）

（おや、先生、この学園が、私に、
おや、先生、この学園が、私に、
おや、先生、この学園が、私に、
先生の教えを受け、学生、

生徒、学園関係者はもちろんのこと、先生を知る各界の多くの人たちは、いつかは

今日の日が来るのを恐れながら、それが現実になったいま、心の支えを失って深い悲しみ

の中にあります。そして

先生の九十余年のご生涯はこれらの人々によって伝説として

わが国教育界に長く長く

語り伝えられるでしょう。

いま、永別するにあたり、

ご遺族やあなだの薫陶を受け、学園関係者があなだのご遺志を継ぎ、武田学園が

さらにいつそこの発展を成し遂げられることを確信して疑いません。

ミギ先生、どうぞ安らかに
お眠り下さい。

平成六年二月二十六日

葬儀委員長 宮澤喜一

弔 辞

学校法人武田学園学園長、広島文教女子大学名誉学長・武田ミキ先生には、輝かしい新春を寿ぐこともなく、遂に去る平成五年十二月二十七日午前七時五十分、急性気管支炎のため九十二歳の尊くも輝かしいご生涯を終えられ、あの黄金の花咲く極楽浄土目指して永遠の旅路につかれました。

本日学園関係者相集い、深い悲しみの内に学園葬が厳肅且つ盛大裡に営まれるにあたり、全私学連合、日本私立大学連合会、日本私立大学協会を代表して追悼の辞を申し上げたいと存じます。

顧みますに先生は明治三十四年十一月二十日、広島県沼隈郡千年村字常石において、神原嘉平治様の五女として生を受けられました。ご母堂様には産後の経過が悪く、生後三カ月、またご尊父様とは生後八カ月で幽明境を異にされるにいたり、ご両親のご慈愛にふれることもなく、お姉様やご兄弟の深い愛情のもとに成長されました。

もともと神原家は、祖父の代には千石船三隻を有し、名門豪商として隆盛をきわめておられました。ご尊父の代になって、鉄道などの交通機関の急速な発達により千石船は次第に衰退し、先生のご幼少の頃には家計も極度に窮迫する運命にあられたと洩れ承っております。

しかし、先生はこの不遇の中にあつて、私は貧乏だから、親がないから淋しいとか、悲しいと言うような意識は少しも感じたことはなかったと述懐されておられます。

先生はもともと、ご幼少の時から感受性に富み、自立心が強く、既に小学校の頃には将来立派な教育者になりたという大志を抱いておられたとのことでございます。

しかしながら、家庭の事情もあつて広島県立福山女学校への入学は断念され、短期で卒業できる私立増川実科高等女学校に入学されましたが、同女学校卒業だけでは教員の資格が得られないため、教員検定試験の勉強に励まれ、その甲斐あつて最大の難関であつた第一次検定試験に見事に合格、待望の母校の増川高等女学校の講師に就任され、教育者としてのスタートを切られることとなりました。

そして、昭和四年三月には文部省教員検定試験に合格され、同年四月、呉市立阿賀高等実践女学校の教諭として着任、その活躍ぶりはまさに水を得た魚のように、素晴らしく衆目賞賛の的でした。

さらに昭和十七年四月には、先生の教育に対する情熱とその教育の成果が高く評価されるところとなり、広島県教育主事に栄進されました。

ところが、昭和二十年八月六日、広島市は世界初の原子爆弾の洗礼を受け、一木一草にいたるまで灰燼に帰しましたが、その時、先生は幸運にも比婆郡方面にご出張のため九死に一生を得られました。そして八月十五日、昭和天皇のご詔勅を拝し、止めなく流れるそのなみだと深い悲しみの中から日本の降伏を確認されたと言われております。

弔 辞

それから間もなくのこと、あの鉄人のような強い信念の持ち主であられる先生に死の宣告ともいえる結核性リン

パ腺炎という病魔が襲いかかるところとなり、遂に、昭和二十二年八月、惜しまれて広島県教育主事を退任されました。

しかるに、当時四十八歳であられた先生は病魔に侵されながらも教育に対する情熱と夢を喪失されることなく、日本の敗戦による国民の実状を憂い、何としても地域社会のお役に立ちたいという願望から、教育に生き、教育に死する覚悟と信念のもと、ご実家のご兄弟を説得され、昭和二十三年一月、病氣を押して学校創設に着手されることとなり、旧安佐郡を中心に候補地の選定にとりかかれる一方、学校設置申請書の作製に意をそがれました。

その結果、先生のご熱意は地域の方々にも強い感銘と共感を与え、その協力と支援もあって、晴れて昭和二十三年三月三十一日、広島県可部女子専門学校が認可され、初代校長に就任されました。

先生は終戦の退廃した道徳、混乱した世相の中で成長する若き女性を正しく強く、且つ日本女性の美徳を失わぬ教育を夢見て、雄々しくも立ち上がられたのでありますが、再び先生は開学間もない昭和二十三年の秋頃から重篤の背椎カクエスのため意識不明の重体に陥られ、約半年間死線をさまよわれたのであります。幸いにも、神は先生の教育に対する熱情を見捨てることなく不死鳥の如く甦えられ、それから先生は再び教室内にベッドを持ち込み、九年間の長きにわたって病床から陣頭指揮をとられるなど、まさにその姿勢は教育者の亀鑑といっても過言ではないと存じます。

次いで、昭和二十七年七月十五日には学校法人武田学園を創立、初代理事長に就任され、更に、昭和三十一年十二月二十二日、広島県可部女子高等学校を設立され、学校長に就任、そして同三十二年四月には開校式を盛大に挙行されました。

先生の教育に対する意欲はとどまるところを知らず、多くの困難を克服して、昭和三十七年四月、可部女子短期大学を設立し、理事長、学長に就任、そして、昭和四十一年一月二十五日には、先生の夢であり、念願であった広島文教女子大学を創設されました。

これによって、先生多年の懸案であった幼稚園から大学院までの一貫教育体制が整い、今日の武田学園盤石の基盤が確立されるに至りました。

このようにして、先生の女子教育は実に七十一年の長期に及び、その間、理事長、学長、校長として卓越した見識と高潔な人格、強い忍耐力と熟慮断行の意志力は、わが国教育、とくに私学女子教育の振興に多大の貢献をいたされました。よって、このご功績により、文部大臣表彰四回、又昭和四十七年には国民として、教育者として最高の荣誉である勲三等瑞宝賞、昭和六十三年には勲三等宝冠章受賞の榮に浴される等、そしてこの度のご逝去に際し、従四位に叙せられました。

先生は昨年の春頃から急に体調を崩され、ご自宅において静養を続けられておりましたが、平成五年四月一日付をもって先生の唯一のアシスタントとして苦勞を共にしてこられた、ご長男の武田学千先生に理事長、学長の要職を引き継がれ、自らは学園長、名誉学長として病床よりご長男の学園経営を静かに見守ってこられました。

先生はまさに教育に生き、教育に死すという信念通り、身をもって具現実証された末、大学構内のご自宅において、ご長男、ご親戚に見守られながら従容として永遠の眠りにつかれました。

先生の超人的ともいえる教育に対する情熱と輝かしい業績を偲びつつ、ここに限りない敬意と感謝をこめて追悼の辞といたします。

弔

辞

どうぞ武田ミキ先生、安らかにお眠りください。

平成六年二月二十六日

合 掌

全私学連合会代表

日本私立大学団体連合会会長

日本私立大学協会の会長

橘 高 重 義

日本私立大学協会副会長

日本私立大学協会中四国支部長

広島経済大学学長

(代読) 石 田 成 夫

弔 辞

平成五年十二月二十七日午前七時五十分、武田学園の創設者であり創成者であつた武田ミキ先生は、忽焉と現し世に別れを告げられました。驚愕が、衝撃が、学園に走りました。この一年数か月、病床に伏しておられたこと、九十二歳という高齢であることは十分に認識しておりながら、まだまだ学園の将来を見守り続けてくださると信じきつていた学園の関係者にとって、それは衝撃であつたのです。

ミキ先生は、教育に生き、教育に死するという信念のもとに、十九歳にして教育界に身を投じられて以来一意専心自己の教育信念に従い、その教育信条を実現するために、“誠”と“為せば成る”（上杉鷹山公箴言）の生活信条を座右にして努力重疊の生涯を貫かれたのでした。その教育一点集中主義の生涯の半ばにして、第二次世界大戦における敗北という日本の歴史上未曾有の転変の機において武田学園の創設という大事業を立志し、昭和二十三年以降のその大事業創成のために身を擲つて尽瘁してこられたのでした。

弔 辞

可部女子短期大学創設前後よりミキ先生の教育事業の進展のことに近侍していた私は、ミキ先生の“心を育てる”ことによつて“人を育てる”という極めて人間的情感に溢れた教育信条に共鳴し、その教育信条が広島は可部の地

に着実に実現される実行力と決断力とに瞠目しながら、懸命にミキ先生の教育実現のために追尾していったのであります。それは武田学園の教育のことに参画している人たち一人一人の心でありました。その一人一人の心が、ミキ先生を中心にして凝集し、今日の武田学園を築いたのであります。ミキ先生の人間的牽引力は絶大なるものがあつたのであります。

ミキ先生が現し世を去られましても、その教育魂は、何時までも可部のこの地にとどまって武田学園の永遠に続く教育経営のことを見守り続けるであります。そこでは、ミキ先生の教育信条が常在再生しながら新しい教育方法を産み出し続けるであります。そういう地盤をミキ先生は創つてくださったのです。私どもは、ミキ先生の心が何時までも武田学園の教育の在り様を見守り続けてくださることを信じ、武田学園の教育の更なる発展のため尽すことを誓うことであります。

ここに私ども教職員の鎮魂の書『遺響』を霊前に供えて、武田ミキ先生逝去を悼む言葉といたします。

平成六年二月二十六日

武田学園教職員代表 横山 邦治

弔 辞

故武田ミキ学園長先生の御霊前に私たち同窓生一同は謹んで心から哀悼の誠を捧げます。

ミキ先生は、武田学園の創設者としてまた長く広島文教女子大学の学長として同窓生すべての師長として仰がれていた方でありました。一昨年から病床にあられたところ、昨年のも暮れもおしせまった二十七日に突然幽明境を異にされるにいたりました。

ミキ先生が急逝されたあとの私どもは、まさに暗夜に灯火を失ったようで、ただ悲しみに沈むばかりです。

ミキ先生は、私も同窓生にとりましては、師であり、母でもありました。

先生はよく言っておられました。「誠に徹した優しく強い女性になりなさい。そしてどんな苦しい試練に遭ってもまけてはいけません。歯をくいしばって耐える心、忍苦の精神をもちなさい」と。先生が歩んでこられた九十二年の人生において、地道な努力の結果がまさにこのことを証明しております。

先生は、学園訓にあるように本当に正しい実践力のある人でした。

しかし先生、先生のまかれた種子は、各方面にあって実を結びつつあります。

「一粒の麦、もし地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらん。もし死なば、多くの実を結ぶべし。」

先生はお亡くなりになりましたが、先生がまかれた愛の種子は一日一日と育っております。

先生、今日はこうして先生の教えを受けた者がたくさんお別れにまいっております。先生のお名前を恥ずかしめることのないことをお誓い申し上げつつおいとまをもうしあげます。

ミキ先生、さようなら

平成六年二月二十六日

同窓生代表
文国四期生

正 本 洋 子